

報道機関 各位

熊本大学

高齢者において、認知症に誤診されうる発達障害 が存在することを世界に先駆けて報告

(ポイント)

- 認知症専門外来を認知症疑いで受診した患者446名のうち、7名（1.6%）が発達障害（ADHD）であったことが判明した。
- 先天的な疾患と考えられている発達障害が、加齢により後天的に顕在化する可能性があることが示唆された。
- ADHDと診断された高齢患者の約半数が、治療薬により症状が改善した。

(概要説明)

熊本大学病院神経精神科の佐々木博之特任助教、同大学大学院生命科学研究部神経精神医学講座の竹林 実教授らの研究グループは、認知症が疑われ熊本大学病院の認知症専門外来に紹介された446名の患者について調査研究を行ったところ、7名（1.6%）の患者が認知症ではなく、発達障害の一つである注意欠陥多動性障害(ADHD)であったことを世界に先駆けて報告しました。このことにより、先天的な疾患と考えられている発達障害が、加齢により後天的に顕在化する新しい可能性が示唆されました。さらに、認知症と誤診されうる発達障害の高齢患者の約半数は、ADHDの治療薬で症状が改善したことから、適切に診断し治療を行うことで回復する可能性があることが明らかとなりました。本研究は、高齢者診療において重要な知見であると考えられます。

本研究成果は令和4年5月24日に英国科学雑誌「BMC Psychiatry」に掲載されました。

本研究は文部科学省科学研究費助成事業の支援を受けて実施したものです。

(説明)

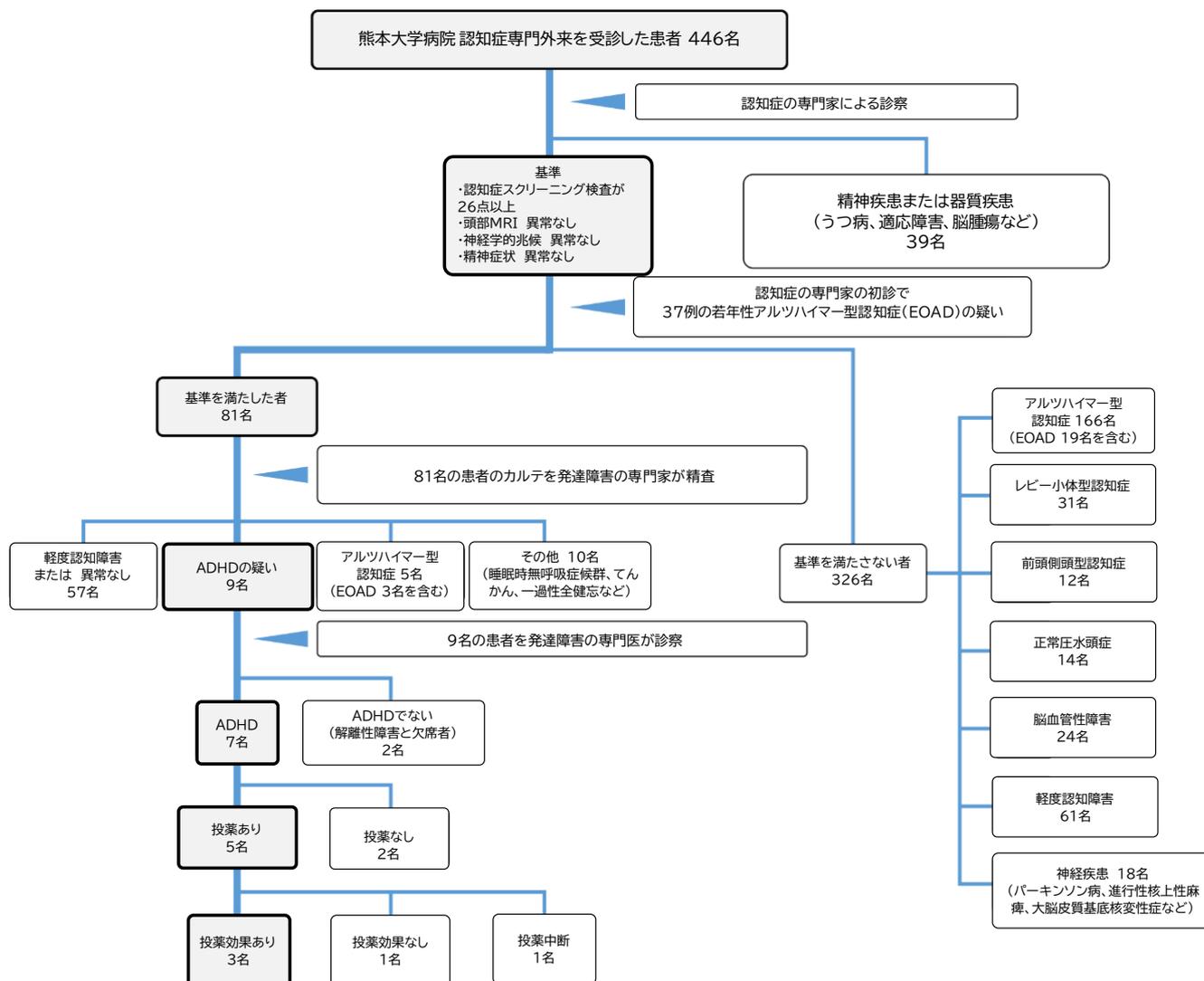
熊本大学の研究グループは、以前、高齢者において認知症のように誤診されうる発達障害患者を見出し、症例報告を行いました（Sasaki H, et al. 2020）。その症例では、これまで日常生活でそれほど大きな支障がなかった60歳前後の会社員が、徐々に物忘れや不注意が目立つようになり、認知症を疑われて認知症専門外来を受診しました。詳細な検査や検証の結果、認知症ではなく、加齢により顕在化したADHDと診断されました。さらに、ADHDの薬物療法後は物忘れや不注意の症状が改善し、復職することができました。発

達障害と認知症では、治療薬や予後が大きく異なるため、その鑑別をすることの意義は大きいと考えられています。

この知見を踏まえて、今回、高齢者において認知症のように誤診されうる発達障害患者がどの程度存在するかを明らかにする目的で、熊本大学病院認知症専門外来を認知症の疑いで受診された446名を対象に調査研究を行いました。具体的には下記の図に示す手順のように、患者をまず認知症を専門とする医師が診察して認知症の有無を見極め、認知症が否定的とされた患者を発達障害を専門とする医師が評価するという研究です。結果、7名（1.6%）が後天的に顕在化したADHDであったことが判明し、そのうち約半数にADHDの治療薬の効果がありました。以上から、認知症と誤診されうるADHDの患者は決して稀ではないということ、さらに、適切な治療を行えば高い確率で回復が可能であることが示唆されました。

（今後の展望）

今後さらに、大規模な調査を行い有病率を明らかにし、認知症に誤診されうる発達障害患者の存在を社会へ啓蒙することが必要であると考えられます。また、高齢者の発達障害を適切にかつ簡便に鑑別するツールの開発が急務です。



(論文情報)

論文名 : Late-manifestation of attention-deficit/hyperactivity disorder in older adults: an observational study

著者 : Hiroyuki Sasaki, Tadashi Jono, Ryuji Fukuhara, Kazuki Honda, Tomohisa Ishikawa, Shuken Boku and Minoru Takebayashi

掲載誌 : BMC Psychiatry (2022) 22:354

doi : 10.1186/s12888-022-03978-0

URL : <https://doi.org/10.1186/s12888-022-03978-0>

【お問い合わせ先】

熊本大学病院 神経精神科

担当 : 特任助教 佐々木 博之

Tel : 096-373-5184

Mail: okusuribennkyoukai@yahoo.co.jp